観見の目つけ

鳥取県
面影剣道教室
小学６年　　菊　川　泰　毅

剣豪宮本武蔵が書いた「五輪の書」に「観見の目つけ」という言葉がある。「観見」の「観」という字は心で観る、「見」という字には目で見るという意味があるそうだ。剣道で考えると、「見の目」は試合で相手の動きを見て動き出し、「観の目」は試合で相手の心を観て先に考えるということ。宮本武蔵は「観の目」を強く、「見の目」を弱くして、目先のことに目をうばわれるのではなく、物事を高い所から眺めたり見下ろしたりして、状況全体を見ることも大事だと書いていた。

ぼくは小さいころ、かかり稽古で厳しい先生のところに行くのがいやだった。こんなに厳しくしたら、ぼくみたいにかかりたくない人がたくさん出てくると思っていた。それに比べてやさしい先生は、みんなのことを考えてくれていると思っていた。だからいつもその先生のところにかかりに行っていた。でも試合にたくさん出るようになって、厳しい先生がぼくのことを思って厳しくしてくれていることに気が付いた。ぼくの弱い部分を教えてくれて、強くなれるように稽古をしてくださっているのだと考えるようになった。やさしい先生は、みんなから嫌われないようにしているだけで、みんなのことを思っているわけではないのかもしれないとも思った。ぼくは、厳しい先生と稽古できることがうれしくて楽しくなった。小さいときのぼくは「見の目」で見ていたのだと思う。厳しい先生の心を観ようとしたら、その先生の優しさと、ぼくたちへの気持ちが伝わってきた。

もう一つ、思い出すことがある。それは年長の時の合同稽古会で「〇〇さんは絶対面に来るから胴を打ちなさい」と言われたことだ。ぼくは言われたとおり、年上のせんぱいに胴を決めることができてうれしかった。でも言われたとおりにして勝てただけで、実力で勝てたわけではないと思うとすごくもやもやした気持ちになった。今、道場の先生方は、試合前にはいつも「自分にできることを精いっぱいやっておいで」とぼくに声をかけてくださる。〇〇をしろと言われてその通りにしたらその時は勝てるかもしれない。でも、それが自分のためになるとは思わない。ぼくは自分で考えて剣道ができるのがとても楽しいし、だから思い切った技を出すことができる。それは宮本武蔵が書いていた「観の目」で剣道をできているからだと思う。

六年生になりキャプテンになった。キャプテンとして「観の目を強く、見の目を弱く」するにはどうしたらよいか考えた。一つは相手の学年や見た目だけで判断しないこと。相手をよく観て、何を考えているのか、どういう人で、どういう剣道をするのかを考えること。それは学校やふだんの生活でも生かせることだと思う。

もう一つは、下級生だから何もできないと思って、上級生が何でもやってしまわないこと。自分でできることまでやってあげるのは、下級生のためにはならないと思うからだ。

どうしても無理なことだけ手助けをして、自分にできることは自分でやってもらうことを意識したいと思う。ぼくが道場の先生方や先ぱいたちにそうしてもらったように、今度はぼくが後はいのみんなに伝えたいと思う。